
ですっとダンス

月乃怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ですつとダンス

【NZコード】

N3501W

【作者名】

月乃怜

【あらすじ】

ですつと団のメンバー、一護・ルキア・ウルキオラは真剣に考え
る。

――この事件の糸口はなんだ?――
三人が必死に考えていたのは 教頭のカツラを勢い余つて取

つてしまい、いかに自然に元に戻すか。

こんなしょうもない事件を次々と起こしては解決していく。
ときには生徒会も加わって大波乱!!

スケットダンスを基にした敵味方関係ないゆるーいオールキャラ学園コメディです。よければお越しください！

（感想の制限をなくしました。誰でもお書きください！）

設定（随時更新）（前書き）

このストーリーの**設定**です

設定（ 隨時更新）

ですつと団

黒崎一護…ですつと団リーダー

喧嘩が強くて不憫で苦労性

基本突っ込み役

朽木ルキア…白玉とウサギが大好き

よく一護に奢らせる

かわった口調でしゃべる

ウルキオラ・シフラー…トマトが大好き（分かる人にはわかるかも）

基本ボケ役
よく一護とルキアの写真を流出させてる

浦原喜助…ですつと団の顧問
あまり出番がない

化学室で変な薬作ってる（被害者一護）

生徒会

市丸ギン…生徒会会长

サボリ癖がすごい

干し柿生きがい。学校の裏でもこつそり作っている。

日番谷冬獅郎…生徒会副会長

ギンのサボリ癖に頭を抱えている

一護とは話が合う様

井上織姫…マイペース

味覚が個性的

発想がユニーク

伊勢七緒…苦労人

会長でも書類でビンタする
メガネをはずすと怖い

綾瀬川弓親…ナルシスト

目のひらひらが気になる
美しいもの大好き

その他

阿散井恋次…一護とは悪友

誰よりも不憫

サッカー部のキャプテン

檜佐木修兵…海燕と仲がいい

女子生徒に大人気

・黒崎家

黒崎一心…娘、息子、母溺愛の黒崎家の大黒柱でお調子者

黒崎医院の院長

黒崎真咲…黒崎家の中心

現在はカンボジアなどで医療の仕事をしている

黒崎海燕…黒崎家の長男

パソコンでシステムのしつかり者

黒崎遊子…双子の長女

すごいお兄ちゃん子

今は母の変わりに家事をしている

黒崎夏梨…双子の次女

一護と似た雰囲気を持っている

・朽木家

朽木紺真…ルキアの姉

大人しく、優しい性格

・シファーア家

グリムジョー…シファーア…ウルキオラの弟

兄に同じくトマト大好き
名前に無理がある

学年の組織

2	2	冬獅郎・井上
2	3	一護・ルキア・ウルキオラ・恋次
3	4	海燕・修兵・都
3	2	乱菊・ギン

数学教師…朽木白哉 ルキアとは義兄。紺真と結婚している
国語教師…藍染惣右介 メガネを取るとオールバックになり（心
が）オールブラックになる

化学教師…涅マユリ 一護や恋次をやたら解剖したがる

体育教師…更木剣八 一護がお気に入りの戦闘狂 眼帯を外すと

でかくなるとか

— 講べるの吸難（前書き）

基本一話完結です

一 護ぐとの受難

一時間目・英語

一時間目から英語つてなんだよ。気分下がるわ。国語やらせり国語。

隣のルキアはさつきから

「私は日本人だ。英語など必要ない。」

とかぶつぶつ言つてるしょー。つーか怖いわ！

教師はこっちガン見してくるし、黒板爆破してくんないかな。

二時間目・体育

ちょっとまで、何だこの状況。

なんで俺、更木先生に追いかけられてんの！？

更木先生には『絶対に気に入られてはいけない先生』という嫌な称号がある。

この称号がついている人は他にもいるが、俺はこの人だけで十分だと思うんだが…

「殺さうぜー護オー！」

つて言つてゐるけどあんた一応教師だろ。教師がそんなこと言つていいのか。

周りの奴らも見慣れたような田や、哀れな田で見るな。

とりあえず助けてくれ。

二時間目・化学

これはやばい。命の危機だ。

涅先生も『氣に入られてはいけない先生』の称号がついてる。

涅先生がニヤニヤした顔でこちりに向かつてくる!
待つてください、俺にはまだやり残した事があるんです。

遊子、夏梨、お兄ちゃんはもうすぐ死んでしまうかもしません。
仏壇にはチョコレートと明太子を供えておいてください。

そう死ぬ覚悟を決めたとき、恋次がタイミングよく話しかけてきた。

先生の田が「いづちでもいいか」と光った。

俺はその隙を逃さず、その場を恋次に任せて一旦散に逃げた。

「え？ — 謙？」

「ちよつと君、手伝ってくれないカネ？」

「あ、え？ いや、俺は…」

「いいじゃないカー。」ちらりと来タマヒヨー。」

あぎやあああああああああああ

そのあと恋次の叫び声は聞かなかつたことにした。

四時間目・数学

数学は結構すきだ。先生もまだ普通で分かりやすい。でも、やっぱ「」の学園の先生わけで…

「では、この問題分かる者。手を挙げよ」

「先生」

「なんだ、分かったのか？」

「檜佐木くんが爆睡中です」

「……せうか、ならばしかたがない」

先生はカツカツと修兵の近くまで行き…

ガツ…！

メロッヒ机に修兵型の穴が開いた。

「グホつ！…？？」

ありえない音が修兵の頭から響いた。

「起きたか。では、授業を再開するぞ。では檜佐木、この問題を解け」

「え、ちょ…分かりません…」

「これからはしっかり聞いておくよ！」

これだから朽木先生の授業は寝られない。

「わすが兄様…」

ルキア、お前はどうか変だ。

こんなことがつづくと身体も疲れきっていて。
おかげでぐっすり眠れる毎日。

……てか、これからもこんな日々続くの？

勘弁してくれ……

一 講べとの収難（後書き）

兄様動かしにくつ！

つねに、小説書くのつてこんなに大変なのか・・・

感想、文章構成、誤字脱字など、どんどんよろしくお願いします！

生徒会のサボリ癖が酷いんだがひつめつめ（前）（前書き）

田畠谷くふと乱菊さん登場です。

生徒会長のサボリ癖が酷いんですがどうしよう（前）

PM3:00 ですと団部室にて

生徒会副会長の冬獅郎が相談があると、部室にやって来た。

「ですと団に少し協力してもらいたいことがある」

「珍しいな、生徒会からなんて…んで、用件は？」

「うちの会長、市丸会長のことだ。」

そう、深いため息をつきながら言った。

「おい、大丈夫か？俺達でよければいつでも相談乗るからな？」

うんうん、とウルキオラとルキアが頷く。

「お前ら…いい奴だな」

まあいい、それで用件というのは会長の弱みを握ってる奴を探して欲しい

「それはまた…そんなに苦労しているのか？」

「伊勢も井上も綾瀬川も困っている」

「わかった。探してみるよ」

「すまないな。では仕事が溜まってるからこれで帰る」

「がんばれよー」

「うう、冬獅郎は帰つていった。

「一護、依頼はつけたものの、どうやって探すのだ？」

「そうなんだよな。」

「貴様何も考えず受けたな？」

「う…でもあのやつれた顔見るとなあ…」

うーん、と考え込む三人。

何かを思いついたようにウルキオラが口を開いた。

「そういうえば、市丸会長には幼馴染がいたな。その人を使うというのはどうだ？」

「ああ、あの有名な乱菊さんか？」

松本乱菊といえば、この学校で知らない人はいないくらいだ。高校生とは思えないくらいのナイスバディだが、本人はサバサバした親しみやすい性格である。

「聞けば市丸会長はその松本先輩に頭が上がらないという。」

「それはいい案かもしけんな！」

「ああ！それで行こう！」

3 - 2 教室にて

「あの、松本先輩は居られますでしょうか？」

「ん？ おう、松本だな。おーい！ 松本！ 後輩が呼んでるぞ！」

「え？ あたし？ はいはーい」

乱菊はすぐにこちらに走ってきた。

「あたしに何か用かしら？」

「はい。あの、市丸会長の事なんですけど、あの人が全然仕事し

なくて生徒会の人達が困っているんですけど、なにかいい手はありますか?」

「ああ、またあいつは……うーん、そりねえ……」

なにかなかつたかと考え込む乱菊。ん?と思いつ出したように言い始めた。

「あいつ、昔から寝相悪くてね、起きたら布団がひっくりかえってるわ、目が覚めると部屋からでて廊下で寝てるわで大変だったのよ。それが仇となつて中学校の修学旅行でなぜか部屋が違うあたしの所に来てたの。朝起きたらびっくりしたわ~。隣でギンが寝てるんだもの」

笑い事でない氣がするがそんな事があつたそつだ。

その後ギンは乱菊と同じ班だった女子に騒がれて修学旅行は大変居心地悪かったそつな。

「……女の敵だな!」「いや、市丸会長も悪気があつた訳じゃないし……」「少し同情する」

意見様々だが会長の弱みは聞きました。

生徒会長のサボリ癖が酷いんでやがひつてしまつ（前）（後書き）

長くなつたので後編につづります。

生徒会長のサボリ癖が酷いんだがひつもしうつ（後）（前書き）

前回の続きをです。

生徒会長のサボリ癖が酷いんですかひつましゅう（後）

です」と団は生徒会室に向かっていた。

「しつかし、ウルキオラが居てよかつたわ。俺等じゃ思いつかな
かつたと思つぜ」「せ」

「いや、言つぱりでもない」

「むつー！貴様と一緒にするでなー！」

「おめー、俺に勉強で勝つたことあつたか？」

「貴様……」

一護とルキアの喧嘩が始まった。

こつものことなのでウルキオラは気にしていない。

「一護、ルキア、そろそろ喧嘩はやめり。着いたぞ」

「あ、もうだな」

「コンコンッ

「どうひとと団です。失礼します」

「冬獅郎、見つけたぜ、生徒会長の弱み
一護はニヤツと得意げに笑った。

「本当かー？」

「ああ。まあ、その方法を見つけ出したのは我が団唯一の理系だ
けどな」

そういうながらウルキオラに田配せした。

「これはちよつとかわいそつだと思つけどな」

やういい始め、話していった。

やうやく話し終ると、

「……やうか、ありがとな、ですと。これで会長に俺達と同じ苦しみを『えられる』」

冬獅郎は疲労が限界のようだ。思考が危ないぞ。

「おい、皆。今の話はしつかり聞いていたか?」

「はい、もちろんです」

他の二人もしつかり頷いている。

「では、明日この作戦を実行だ」

翌日

「なんやの、こきなり呼び出して。仕事せんでもいいからつてどういつことや? そりゃ嬉しいけど…」

ギンは状況が読めていないようだ。

「会長、貴方が仕事をサボりまくるから俺達はもう疲れたんだ。
だから

「下克上だ」

גָּדְעָן

「会長、貴方はものすごく寝相が悪いですね」ギンが理解していないまま、話を始めた。

「え、なんでその事知ってるん?」

一 あんたの幼馴染に聞

「ちょお、待つて。それってもしかして……」

「ああああああああああああああ!!!!!!」やつやかさうど

ギンは断末魔を叫び、冬獅郎は悪人面でトラウマを抉り出し始め

これではどちらが被害者で加害者なのか分からぬ。

卷之三

「会長、その言葉忘れないでくださいね。じゃあ、

「金額の多いのが難しかったんでお願ひしました

.....え？ これ全部？」

書類の山がいくつも出来ていた

「 」

泣きながら手を動かしていた。

ドアの外から聞かれていたのですと曰は

なんか冬獅郎が鬼に見えた

「世間の本題は、何事か？」

教訓：仕事は「コツ」、「コツ」してこそまじゅう。

生徒会長のサボリ癖が酷いとやがれひつまつめ（後）（後書き）

オチってなんだ。

ギンファンの嘘かさうじめんなさいー…だって動かしやすいんだもー（

）」（）もで読んでくだわつてありがとひづれこおしたーー

ヒーローになれるでしょうか？（前書き）

ヒーローでお馴染みの（お馴染みか？）の人です。

ユーローなるはせむつたりここですか？

AM 8:00 昇降口にて

「お、一護おはよ！」

「おお、ルキアか。はよ」

ほとんどの生徒がこの時間帯に登校していく。

途中で出会ったウルキオラと会流し、下駄箱へ向かった。
一護が自分の下駄箱を開けると白い封筒が入っている。

「ん？なんか入ってるぞ？」

「なんだ？手紙のようだが・・・」

「もしかして、ラブレターか？案外貴様も隅に置けんな」

「ヤーヤしながらルキアが言つと

「オメーは親父か。えーっと・・・ですっと団に頼みたい事があります。放課後、中庭に来てください・・・だとよ」

「なるほど。とりあえず中庭に行つたらいいんだな？」

「ああ。ん？まだあるぞ。P・S・スメルズ・ライク・バット・スピリッツ・・・・

なんか嫌な予感しかしねえ・・・

「ああ、同感だ」

PM 2:30 中庭にて

「遅いな」

「まつたく、自分から呼び出しておいて遅れるとは……」

「二人とも立腹の様だ。」

「……一人とも、上を見る」

なにかに気づいたようで、ウルキオラは一人に言った。
ウルキオラに言われた通り、空を見上げると

「ボハハハハー！！」

人が空から飛ぶように落ちてきた。

ドスン！

「ブホオ！？ゲホツ・・・ゲツホゲホツ！ゲホツ！」

「・・・・・・・・・」

全員が言葉を失う。

そして依頼者、観音寺は三人を指差し、

「スマルズ・ライク・バット・スピリッツ！」

「・・・・・・・・・」

「なんか反応したまえよ！」

「いや、反応しろって言われても、どう反応したらいいかもつともな意見だ。」

「てゆーかなんで落ちてきたんすか」

「先生方から、学校でのパラシュートは禁止って言われて……」「普通に歩いて来いよ！」

観音寺先生は歴史の先生でいつも奇抜な服装をしている。
先生には『気に入られても困る先生』の称号がついていた。

「で、依頼ってなんですか？」

これ以上放つておくと大変なことになりそうだ、と判断したウル

キオラが言った。

「ああ、私からの依頼内容はね、

「私をヒーローにして欲しいんだ」

「はあ・・・」

「私は街中で『あ！ドン観音寺だ！』とか『ヒーローよー』とか
言われたい！そしてあわよくば、女性と付き合いたい！」

三人は最後のが本音だろう、と思いながら力説している観音寺を見ていた。

「まあ、内容は大体わかりました。とりあえず、その服装から変
えていきましょう」

「Why!? なぜだ! ?」

「はつきり言いますと、ダサイです」

観音寺はかなり落ち込んでいる様子だ。

「わかった、変えよう。して、どんな服を着ればいい?」

「そうですね。スースとか持つてないんですか?」

彼はナイスヒゲでワイルドっぽいから元はいいはずだ。

「ああ、持ってる。」

「あとサングラスも外してください」

「あ、はい」

完全に観音寺は下手に出ている。

数分後

「この感じでどうだ?」

そこに居たのはサングラスを外し、スースを着こなしたワイルド

な男性だった。

「おおーいいんじゃないか？普通にかつこっこぞー。」

「いいと思う」

一人にも好評だ。

「ありがとウ。ですと団、この恩は忘れないよ・・・」

もうここ、観音寺は街中を歩いてみる」とした。
暇だつたですと団はしつこく行くことに。

街中を歩くとちらちらと振り返る人たち。

(なかなか・・・いいものだな)

そう思いながら歩を進める。

少し休もつと、観音寺はベンチに座った。

すると少し後ろのほうから女性の叫び声が聞こえる。

「あやあーひつたくりー誰かー！」

その言葉に反応した観音寺は

「むつ！私がユーの鞄を取り返してみせるぞー。」

そう言つて走つていった。

その場に居合わせたですと団は

「ひつたくりだー！譲、こぐれー。」

「了解イ！」

そう言つて走る。ウルキオラは

「あいつら、観音寺が見えんのか？」
と、せっかく観音寺をヒーローに仕立てるチャンスを見逃していく

る一人を見守った。

「チツーもう追いかけてきやがったー！」

「なあ、なんか忘れてる気がするんだが・・・」

やつと気づいたかとウルキオラがため息を吐いた。

「お前ら、観音寺先生のこと忘れてるだろ?」

「「あ」」

「ビーするよ・・・」

「もういいだろ? これからもヒーローになりたいか、なりたくないかを決めるのは先生次第だ」
もうさすがに懲りただろ?」

「むむっ! もしやですっと団もヒーローの座を狙つて・・・!」

次はですっと団をライバルとしてみていくようだ。

ユーロユーノハシヒタリココヤスク？（後書き）

観音寺の口調がわからんねえ・・・

今回なおいしい所取りのですと困りました（笑）

ぐだぐだと長くなりましたが、ここまで読んでいただきありがとうございました！

感想・誤字脱字などよろしくお願ひします！

ルキアちゃんの繪圖（前書き）

テストのお話です。

ルキアちゃんの審問

PM2:30 ですと団部室

「そういえば、もうすぐテストだな」
きつかけはこの一言だった。

「ああ。ところでルキア、お前大丈夫なのか？」

「あ、ああ。大丈夫だぞ！」

肩が揺れ、きよどり始めるルキア。明らかに態度が変だ。
二人はすぐに察す。

(「いつ・・・嘘だな）

「なんだ！その疑いの目は！」
「ルキア、一回ノート見せてみる」
そう言うと焦り始めた。
「いやだ！」
「何も書いてなくとも怒らねえって」
「・・・本当だな？」
そう言ってゆっくりとノートを一人に見せる。

「・・・これは」
「予想はしていたが真っ白だな」
「うつ・・・だから見せたくなかつたのだ！」
ルキアの目は半泣き状態だ。
しかし、これ以上のことをウルキオラが言つ。
「・・・一つ提案がある」
「なんだ？」

「俺が小テストを作る。それを解いてみたらどうだ。」

「いいんじゃねえか、それ」

「なつ！？いやだ！」

ルキアが必死で反対するのを見て一護が言つ。

「ルキア」

「・・・なんだ」

「団長命令な」

「職権乱用だー！」

ルキアの叫び声は廊下に響いた。

数分後

「出来たぞ」

ウルキオラの作った小テストをグチグチ言いながら解いたルキア
は疲れ果てていた。

採点結果

国語	90	点
数学	40	点
理科	42	点
英語	25	点
社会	88	点

「・・・これはまた」

「ある意味凄いな」

「う、うるさい！」

ルキアもう泣く寸前だ

「でも、国語と社会はかなり良いじゃねえか」

「理数系は壊滅的だが」

ウルキオラが止めを刺す。

「・・・理科と数学は頑張れば何とかなりそうなんだが、英語はどうしてもな・・・」

落ち込むルキアに一護が救いの手を伸ばす。

「しょーがねえな、英語は俺が教えてやるよ」

「なら、俺は数学と理科の勉強の仕方を教えよう」

ウルキオラはいつも学年主席、一護はトップ一〇には入っている。

「・・・いいのか?」

「元からそのつもりだったしな」

一護してルキアのテスト勉強が始まった。

英語

「で、どじが分からないんだ?」

「全部」

「おじ」「」

即答で答えた。

「まあいいや、じゃあ簡単な問題作るから、わからなかつたら呼

べ

「うむ」

数秒後

「一護、わからん」

「はええなオイ。で、どじだ?」

ルキアの指す問題を見ると

「have to」とmustの違いは何だ?」

「そこ中学の問題じゃねーか!」

have toとmustは同じ意味だが、否定文になると「しなくてもいい」としてはならないになる

「うーん・・・イマイチ」

「そうだな、例で言つと肯定文は

恋次は涅先生に逆らわなければならぬ、とする。

否定文では、涅先生に逆らわなくとも良い、と涅先生に逆らつてはいけない、になる

「ほうほう…どうひじる恋次の命運は叶かぬだが分かつたぞ！」

恋次を犠牲にして少しづつ理解していくようだ。

理科

「どうやって勉強したらいいのだ？」

「自分で分かりやすいようにノートにまとめたうりだ？」

「おお、なるほど…」

「・・・よし、出来たぞ！」

「そのノートを毎日数回繰り返し読むといい。それだけで随分違うからな」

数学

「」の問題を聞いてみると、といわれたルキアは黙々と解いていた。

「む？ これははどうやるのだ？」

「」の問題にはこの公式を使つ。

・・・よく出来ているな。次からは応用問題をすると良い。応用は配点が高いからな

ウルキオラはアドバイスをしつつ、教えていた。

「」の週間が過ぎ、テスト当日

(むつ！？なんだか凄い勢いで問題が分かるぞ！)
勢いが良すぎてルキアの席からはゴリゴリゴリとありえない音
が鉛筆から出ていたそな。

テスト結果

国語	95点
数学	70点
理科	75点
英語	65点
社会	80点

そして学年でトップ20に入ったそな。

- 「一護！ウルキオラ！」
- 「おー、見たぜ。頑張ったな」
- 「・・・おめでとう」
- 「一人ともうれしそうに祝福してくれた。
- 「ああ！一人のおかげだ！」
- 「ばーか、最終的に頑張って努力したお前の結果だよ」
- 三人で少し話した後、
- 「・・・よし！テストも終わつたし景気づけにカラオケ行くか！」
- 「たまにはいいな。俺は賛成だ」
- 「行くぞ！」

そう言つて三人は走つていつた。

ルキアちゃんの翻訳（後書き）

・・・なんかウルキオラすつじこしゃべつてるような・・・
ま、いつかー（

高校の問題は分かりません。
だつて中学生だから（オイ
なんの教科があるかなんて知らないよー

ウルキオラつてどんな歌歌うんだるつか？

J - P O P ? いや、想像できないな。

演歌か？いや、それはそれで面白いけど（いいのか

）J - P O Pまで読んでくださいありがとうございました！
感想、誤字脱字などありましたらお願いします！

大波乱の体育祭（前書き）

あわわわ・・・お久しぶりの更新です。
体育祭のお話です。

大波乱の体育祭

AM9:00 運動場

今日は体育祭でどのクラスも気合が十分入っている。それは一護たちのクラス、2・3も例外ではない。

「それにしてもあつついな・・・」

「そうだな。まさに体育祭日和だ」

一護とルキアが少し話していると、織姫がやつて來た。

「黒崎くーん、朽木さーん！」

「おお、井上。どうした？」

「いよいよ体育祭だね。2人とも何の競技に出るの？」

「私はハードルだ。一護は確か、1000mだったな」

「ああ。・・・それにしても井上楽しそうだな」

一護の言つとおり、織姫はいつも以上に笑顔だつた。

「だつて借り物競争があるでしょ？自由参加だから出ようと思つて！」

去年まで借り物競争は他の競技と同じ人数制だつたのだが、毎年大勢の参加希望者が出て後からブーリングが出るので自由参加にされたのだ。

ピーッと笛の音が聞こえた。

「100m走の選手の方は召集テントまで来てください」
召集係の者の声が聞こえる。

「あ！あたし100m走だつた！じゃあね！」

「おー、がんばれよ！」

「一護」

突然ウルキオラが声をかけた。

「ん？どうした？」

「部活対抗リレーはどうする。参加するか？」

「俺はどっちでもいいけど……ルキアは参加したそうだな」

キラキラした目で見上げてくる。

「したいぞ！」

「俺もしたい」

「じゃあするか。何もって走る？」

三人は考え込む。するとルキアが

「ですっと団の宣伝しながら走るか？」

「あー、それでいいんじゃね？」

「決まりだな」

何事もなく、午前の部は終了していった。

100mでは織姫と修兵が一位、1000mでは一護と恋次、走り幅跳びではギンと冬獅郎、ハードルではルキアとたつき、ハンドボールでは海燕とウルキオラ。

午後の部は借り物競争や綱引きなど、得点の付く競技はあまりない。

昼休みの間に部活対抗リレーが行われる。基本は5人くらいでトラックを3周走る。

しかし、ですと団は3人なので一人一周走らなければならない。

左から剣道部、柔道部、吹奏楽部、サッカー部、バスケットボール部、テニス部など並んでいる。

「よーい・・・ドン！」

パンとピストルの音が響いた。

剣道部は竹刀を素振りしながら走つたり、吹奏楽部は吹きながら走つていて中でですと団は・・・

『猫探し、部活の助つ人、雑用なんでも受け付けます。ぜひご利用をー』

スピーカーを持ちながら軽やかに走っていた。

「うおおい！あれずるぐね！？俺たちが必死に走つて中で宣伝と

か…」

『つるさい恋次。もうたい焼きおじいぢねーぞ』
「すいませんでした！」

午後一番では借り物競争が行われる。

コースの真ん中に箱があり、その中に手を入れてお題を成し遂げる競技だ。

そのお題は恥ずかしいものもあれば簡単なものもある。

修兵の場合

「一番付き合いが長い異性」

(一番付き合いが長い異性ねえ・・・あいつか)
すぐに自分のクラスの所に走った。

「ちょっとこいつ借りていくぞ！」

そう言つて担いだのは蟹沢だった。

「うわあ！え？なに？」

そのまま一直線にゴールに行つた。

『女子生徒に人気の檜佐木選手！お題は何だったのでしょつか？』

「一番付き合いが長い異性。こいつ一応幼馴染だしな」

「なんだ、そなうそうと言つてよ。焦つたじゃない」

恋次の場合

「今一番輝いている人」

(輝いている人オ？うーん・・・後で怒られるかもな)

「一角さん！ちょっと来てください！」

「お？なんだ？」

そのままホールへ行く。

『たい焼き命！な阿散井選手！お題は？』

「つむせーよ。お題は・・・ハイ」

そう言つてお題の書いた紙を渡すと逃げ出した。

『何だったのでしょうか？えーと・・・』

今一番輝いている人・・・

そう言うと全員が一角の頭を見た。

「・・・そうか。・・・阿散井イイイイイ！――！」

一角は恋次を追いかけていつた。

海燕の場合

「マイハイ」

(なんつーお題だよ。じゃあ行くか!)

「都！行くぞ！」

「え？ なにかしら？」

そのまま横抱きをして、ゴール。

『兄にしたい人ナンバーワンの黒崎（兄）選手！お題は？』

「マイハイーだつてよ」

「もう少しちゃんと話すから聞いなさい。」

頬を少し染める都に横抱きしたままの海燕。

『まだまだ熱いですねー。外野からもはやし立てる声が聞こえます』

ヒューヒュー、よそでやれ!、リア充が!など色々聞こえてくる

最終種目はクラス対抗全員リレー。

た。 今のエッフは2-3の一護達のクラスと3-4の海燕のクラスだ。

「このリレー勝てば俺たちは優勝だ。気抜くなよー。」

下荒上じやああああああああ!!!!

「ふわいわあ・・・下莞上つてふわいわあ・・・」

ギンが何かを思い出したよつに震えていた。

抜かし抜かれしていたが、アンカーから一番目になると全く一緒の所だ。

「弟でも今回は負けられねえな」

「言つてられるのも今のうちだ。俺が勝つついにアンカーの一護と海燕にバトンが渡つた。

『海燕てめー、弟だからって手加減すんなよー』

『今回はブラン封印しやがれ！』

『都が待ってるぞー！』

など、声援が聞こえる。

『兄貴に負けんなー！』

『頑張れー！黒崎ー！』

『根性見せるー！』

一護達のクラスも負けてはいない。

『おおーっと！有名な黒崎兄弟の夢の対決だー！兄の意地をみせるのかー？それとも弟の下克上がはじまるのかー？』

実況も熱くなっている。

残り数メートルをほとんど同時に走りきった。

『ゴール！さて、判定は・・・』

みんなが唾を飲み込む。

『勝者！3 - 4です！』

ワアアアアと歓声が上がった。

感極まつて、涙を流している生徒もいる。

「わりい。負けちまつたよ」

「しようがないさ、校内一速いつて噂の人だしね」

「あれに追いつく一護もすごいよ」

「でも総合で一位だぜ？すげーよ！」

一護も暖かな雰囲気に包まれていた。

PM 8:00 黒崎家

井上の提案があつて黒崎家で打ち上げをしていた。

体育祭が終わつたあとすぐに打ち上げをし、ドンチャン騒ぎをして

疲れたのか眠る者も出始めた。

一護が全員に掛け布団をかけていると、海燕が一階から降りてきた。

「よう、大分静かになつたな」

「わりいな、疲れてんのにつるさくして」

「いいさ、楽しかったんだる」

兄弟でたわいない話をしていると一護が「うとう」と目をこすり始めた。

「こいつらのこと見ててやるからお前もちよつと横になれ」

「んー。 そうするわ」

すぐに寝息を立て始めた一護に微笑みながら

「おやすみ」

そつ言つた。

大波乱の体育祭（後書き）

一回題名を入れ忘れてデータ全部消えたんだぜ・・・？信じられるか？

どうしても海燕さんを入れたかったんです。

都さんは親公認のカッフルだつたらいい。

設定のほうを色々書き直しましたので詳しくはそちらを。

それにも今回ルキアとウルキオラ全然しゃべってねえ・・・。

では、誤字脱字の報告、感想などお待ちしております！

大混乱の文化祭（1）（前書き）

文化祭のお話です。

恋次が相変わらず不憫です（笑）

長くなると思いますのでいくつかに分けて更新します。

大混乱の文化祭（1）

AM 8：00 教室にて

「もうすぐ文化祭だな」

「ああ。うちのクラスは喫茶店だからなー！」

「へえ、そうなのか？」

「貴様・・・寝ておつたのか？」

そのときの一護は爆睡中だったようだ。

「思ったより普通だな。うちのクラスのことだからもっと変なのかなと思つてた」

自分のクラスをどのように認識しているのだろうか。

「変な提案もあつたが委員長がばっさり切り捨てたのだ

「ああ、石田ね・・・」

「メイド喫茶とか年上の女性のぐどき方講義があつたぞ」

「なんか誰が提案したのか予想つくわ」

おそらく本庄千鶴と小島水色だろう。ちなみに年上の女性の口説き方講義は男子に高い支持があつたようだが不健全ということで除外された。

廊下のほうからすゞい勢いで走る音が聞こえた。

その音はこちらに近づいてきて、教室のドアを開く。

「わりい！ ちょっと匿ってくれー！」

入ってきたのは恋次だった。

「え？ どうしたんだよ？」

一護が恋次に理由を聞こうとすると、もう一度ドアが開いた。

「ゴルラア 恋次イ！ 出てきやがれ！」

「檜佐木さん、どうしたんすか？」

入ってきたのは顔と頭と運動神経が抜群で思考がちょっと残念な修

「おーー護、恋次見てないか?」

「ここにいますよ」

「あーー護でめえ!」

「よお恋次、いい加減諦めて入れや

「いやつすよ!」

二人は言い争いを始めてしまった。3人は置いてけぼり状態だ。

「あの、話がみえないんすけど・・・」

「ああ、実はな文化祭でバンドをしようと思つてさ、俺3年じゃん?
最後の文化祭の思い出作りに残ることしたくて・・・それで恋次
を熱心に誘つてたんだよ。こいつドラムできるから」

「本当の理由は?」

「女子にキャーキャー言われたい」

なんとも本能に忠実な意見だ。

「熱心に誘つて言つよつあれ脅迫だろ!廊下でいきなり胸倉掴ま
れて『バンド入れや・・・』つて!」

恋次も苦労をしているようだ。

「へーーー大変だな」

「・・・ですっと団はなんでも引き受けてくれるんだよな?」

怪しく光った修兵を見て、3人は嫌な予感がした。

「バンドメンバーになれ!」

(やつぱり・・・)

予想は当たつたようだ。

「どうしてもつて言つんなら引き受けますが、俺楽器弾けません
よ」

「私はギターを少しなら弾けますが・・・」

「俺はピアノなら弾けるぞ」

ルキアのギターが弾けるというのは修兵にとって以外だったようで
目を少し見開いた。

「よし、じゃあー護はボーカルな。朽木は俺とギターで、ウルキオ
ラはベースな」

次々と決まっていくものに一護は頭を抱えたくなった。

「まあいいではないか！楽しそうだ！」

「努力はする」

ウルキオラとルキアは結構乗り気だ。

「てか、俺がボーカルでいいのか？」

「何を言っている！貴様しか適任はおらんだろう！」

「いつも90点代を次々に出しているだらう」

どうやら一護は歌がかなりうまいようだ。

「そりや楽しみだな！・・・つーことだ、諦める恋次

修兵はニヤリと笑いながら恋次にそういった。

「分かりましたよ・・・やればいいんでしょ

ついに恋次はバンドに入ることになった。

PM7：30 黒崎家

「ただいまー」

一護がガチャリと家の扉を開けると

「遅いわこの馬鹿息子がー！」

一護の父、一心がどび蹴りを仕掛けってきた。

「なんでだよー！ちゃんと門限守つて帰つてきただらうが！」

「余裕をもつて帰つて来い！」

恒例の親子喧嘩をしていると、妹たちが話しかけてきた。

「一兄、ヒゲにかまつてないで」「飯食べたら？冷めるよ？」

「あ、おかえりー。もうーお父さん暴れないのー！」

「だ、だつて！」

娘に怒られる父を傍から見て、父としてどうなのだろうか、と一護が考えていると海燕が来た。

「親父、一護だつて友達との付き合いもあるんだからや、田中みみてやれよ」

そういうながら一護の頭をわしわしとなる。海燕に怒られていじける一心。

海燕は思い出したように一護に聞いた。

「そういえば一護、修兵達とバンド組むんだって？」

「げっ・・・もう広まつてんのかよ」

「本人から聞いた。修兵が『お前の弟、口説き落としたぜ』って言いやがつたから、何をしたって問い合わせた（齎した）らバンドに誘つた言ってた。で、何もされてないか？」

「くどい・・・何もされてねーよ。心配性だな」

修兵に少し同情しながら呆れていた。

海燕は自他共に認めるシステムでブランだ。あまりに心配しそぎてたまにうざがられる程に。

「え！お兄ちゃんバンドするのー？文化祭、絶対見に行くからね！ね、夏梨ちゃん！」

「え？う、うん。まあ頑張れば？」

大興奮の遊子に冷静な夏梨。双子でも反応は此処まで違うようだ。「もー夏梨ちゃんてば素っ気ない！本当は嬉しいくせに

「なつ！？違うよー」

どうやらただ恥ずかしかつただけのようだ。

兄妹だけで話をしていると一心がぼそりと言つた。

「つう・・・子どもたちが話に入ってくれない・・・。母さん早く帰ってきて・・・」

同時刻 栄木家

「姉様、兄様！文化祭でバンドに誘われたのですが、家にあるギターを使ってもよろしいでしょうか？」

「あら、バンド？珍しいわね、ルキアがするなんてルキアの姉、緋真が言った。

緋真はルキアと顔が瓜二つだ。性格はとても大人しく優しい女性である。

「ですっと固に依頼があつて引き受けたのです
「たのしそうねえ。白哉様、どうでしょ?」

緋真が聞いたのは数学教師の白哉である。緋真とは結婚していくルキアの義兄だ。

ルキアとは美的センスが似ていて自作キャラクター『ワカメ大使』はルキア絶賛らしい。

「良いも何も自分で決めることだ。好きに使え
「ありがとうございます!」

「バンドはだれとするの?」

「一護とウルキオラと恋次と檜佐木先輩です」

「男の子ばっかりねえ。大丈夫?」

わっぽりルキアも年頃の女性なので緋真も心配なようだ。

「黒崎と阿散井がいるから大丈夫だろう・・・やるからには必ず成功させる」

「はい!」

力強く頷いた。

同時刻 シファーア家

「グリムジョー、飯ができたぞ」

「おーう」

ウルキオラとグリムジョーは一つ違ひの兄弟だ。

グリムジョーは高1でウルキオラとは性格も容姿も似ていながら、好きなもの（トマト）だけは一緒。

この兄弟はトマトを愛してやまないのだ。

「そういえば、ですっと固でバンドするんだって?」

「ああ、檜佐木に誘われてな」

「珍しいじゃねえか。何の楽器するんだ?」

「ベースだ」

「へえ・・・ピアノも習つて役に立つこともあるんだな
「俺も意外だつた。・・・テスラとノイトラに餌をやらねば」

「おお、 そつだつた。 テスラー！ ノイトラー！」

「わん！」 「にゃー」

グリムジョーが呼んだのは犬のテスラと猫のノイトラだ。
二匹はウルキオラに拾われ、 この家に住んでいる。
餌をもさもさと食べる二匹を見て一人は和んでいる。

どの家も今日も平和なようだ。

大混乱の文化祭（一）（後書き）

一護が歌つまひつて「これは私の希望です（笑）

海燕さん、またまた登場です。思いつきり私の分身です。
私も海燕さんにわしゃわしゃされたい！

緋真さんの口調が迷子。わからん……！

基本みんな仲良しですのでウルキオラとグリムジョーは喧嘩しません。

二人がもしゃもしゃトマト食べてゐるの絶対かわいい。写真撮りたい
（

テスラ飼いたい。絶対になついたらかわいい。

ではここまで読んでくださつてありがとうございました！
誤字脱字の報告、感想などお待ちしております！

大混乱の文化祭（2）（前書き）

おおおおお遅れてすみません！

今回はバンドで個人の練習編です。

大混乱の文化祭（2）

翌日から練習が始まった。

曲名は「superativo il」ゆつたりとしたバラード曲だ。

作詞作曲は修兵がしたようだ。

その曲を一護達が聴き終わると、

「・・・へえ、結構いい曲だな」

「ゆつたりしてて聞きやすい」

好評のようだ。

「イタリア語、英語、フランス語、ドイツ語で愛に関係するものを詰め込んでみた」

「先輩らしさいっすね」

感心しながら聞いていると、一護は何かに気が付いたようにハッとした。

「ちょっととまて！歌うの俺じゃねえか！恥ずかしすぎぬわー！」

一護が焦り始めるところキアが呆れたように言った。

「いまさら何を恥ずかしがつてある。もっと恥ずかしいこともしていただろう。中学生のときにクラスの女子に頼み込まれて女装とか・

・・・

「ああああああーーあのことを掘り返すんじゃねえーあれトラウマだからー！」

「何があつたんだよお前・・・」

中学生のときから苦労性だつたようだ。

「じゃあ、これ楽譜な。練習して来いよー」

そうしてその場は解散となつた。

s s e s 1 o v a b 1 e ~ るあつ・・・また嘔んだ・・・もー何
なんだよこれ！舌回らりねーよ！」

一護が愚痴を言いながら練習してると海燕がやつてきた。

「おーがんばってんなあ。調子はどうだ？」

「そいいいながら一護に温かいココアを渡す。

「あ、サンキュー。イタリア語だか英語だか知らねーけど訳分からね
ーよ」

「はは！大変だな」

苦笑いしながらも受け答えする。すると、

「あ、あと聞こいつと思つてたんだけどよ、お前とルキアって付き合
つてんのか？」

ブフォツと勢い良くココアを噴き出した。

「・・・はあ！？」

「いや、な？今学校でこの写真が流れてんのよ

そつ言いながら海燕が見せたのは一護がルキアを抱き上げてる写真
だった。

「なんだこれ

「友達から回つてきた」

「ん？ここつて学校の裏庭じゃねーか。そういうえばこの前、用務員
のハリベルさんに頼まれて掃除してたっけ・・・」

「で、どうやつたらこうなつたんだ」

海燕も不思議そうだ。

しかし確かに、掃除してただけではこんなことにはならないはずだ。

「上のほうに「ミミがあつてさ、その高さじゃ俺でギリギリ届かなか
つたからルキアを担いで取つてもらつたんだ。そのときなんでウル
キオラがケータイ構えてんのか気になつてたけどそれか・・・」

「お前も苦労してんだな」

海燕は少し一護に同情してしまつ。

「まあ、練習がんばれよ。兄ちゃんが本番しつかり撮つててやるか
らなー」

そういうながら部屋を出て行つた。

「やめろ！次の日から学校行けねえじゃねえか！……たく、あの兄貴は・・・。練習しよ。」

再び一護は歌の練習をし始めた。

同時刻 栄木家

「えつと次が二のコードで・・・、二二からは二つか？」

ルキアは楽譜と格闘していた。

「失礼する」

入ってきたのは白哉だった。

「随分熱心だな。少し気になつた事があるのだが良いか？」

「？はい、何でしょ、う？」

白哉は真剣な顔をしてこう尋ねた。

「黒崎一護と付き合つてゐるといふのは本当か？」

ガツチャーンと譜面台を倒した。

「す、すいません・・・。それはどこで？」

「今日携帯で騒いでいた者を注意したとき写真をみせられ、聞かれただのだ。これは本当かと。」

白哉に見せられた写真は海燕に送られてきたの一緒だった。

「おそらくその写真を流したのはウルキオラです。全くあやつは・・・。その噂は嘘ですから気にせずにお願いします」

「どうか。では失礼する」

バタンと扉が閉められた。

「えーとそれから・・・」

再び楽譜と格闘し始めたのだった。

同時刻 シファーア家

ウルキオラの部屋からは美しい音色が聞こえてくる。

「・・・こんな感じか」

パチパチと拍手が聞こえてきた。

「グリムジョーか」

「すげえじゃねえか。もう覚えたのか?」

「大体はな」

「そういうえば、学校で今噂になつてゐる黒崎と朽木の写真を流したの
お前だろ」

「そういうながら写真を見せる。

「ああ。今回もいい具合に広まつてるな」

今までにも何回かはあつたようだ。

「あの二人はからかい甲斐があるからな」

ウルキオラが少し笑みを浮かべて言つとグリムジョーが驚いたように言つた。

「・・・お前あいつらと一緒に居るよになつてから変わつたな。
いい意味で」

「そりか?まあ、あいつらと居るのは面白いからな」

「ふーん。ま、頑張れよ。ここトマト置いておくからな」

そつ言つてトマトが三つ乗つた皿を置くと部屋を出でていった。

「・・・やつぱつぱつまこな」

トマトをじゅくつと食べながら呟ついた。

大混乱の文化祭（2）（後書き）

歌詞については触れてやらないでください。

イタリア語と英語、フランス語、ドイツ語を適当に並べただけです
ので（汗）

曲名の「superlativo il」とは最上級の愛とかそん

な感じだった気がします（アバウト）
一護はお母さん似だから女装が似合ひと思つんだ。ね？（誰に聞いてる）

ウルキオラの過去は書いつかないと迷っています。

では「」まで読んでくださつてありがとうございました！

誤字脱字の報告、感想などお待ちしております！

大混乱の文化祭（3）（前書き）

遅れてすいませんでした！
今回で文化祭終了です。

大混乱の文化祭（3）

数日後の放課後、ですと団部室にて

……

「・・・ふう」

曲の合わせが終わり、一護が一息をついた。

「おー、結構出来てるじゃねえか。この調子で本番も頑張るぜー。」

『おお！』

全員、張り切つていのよつだ。

そうして、毎日放課後は全員で部室で練習、家に帰つたら個人で練習をしていた。

始めは渋っていた一護もやるからには真剣に、という性格なので毎日練習をしている。

そういう日が毎日続き、そしてついに、本番がやってきた。

文化祭本番　ステージ舞台袖

（・・・ん？）

一護は朝起きたときから、のどの調子がおかしかった。いつもより声が出にくく、変だったのだ。

そのうち直るだろう、と放つておいたのだが今になつて少し悪化してきたのだ。

「どうした一護？」

ルキアが心配そうに顔を覗くと

「いや、なんでもねえ。ほら、行こうぜ」

「あ、ああ」

ステージ

「ここにちはーー皆のアイドル、檜佐木修兵でーすー。」

「キヤーー!と観客のほうから歓声があがる。

「先輩、皆のアイドルとか寒いつす」

「では、メンバー紹介から!じゃあ、一護!」

「無視か!さらっと無視か!」

修兵は恋次の突込みを華麗にスルーし、メンバー紹介に入った。

「ボーカルの黒崎一護です」

「一護はチョコレートが大好きだから、あげたら懷くぞ!」

「俺は犬か」

少し茶々を入れながらメンバーの紹介をしていく。

メンバー紹介が終わると修兵が

「グループ名は『p a l e t t e』です。よろしくーー!」

残りの四人はポカーンと口を開けていた。

「初耳なんですけど」

「そりやそうだ。今考えたし」

「おいコラ」

四人からはブーイングが来るが修兵はお構いなしに進める。

「うるせーな。んじやま、歌うぞー・・・『superlative voice』」

今までのぐだぐだが嘘かのように、始まると全員の目つきが真剣になつた。

a mants bien-aim affectionner d
or l'oter mignoter
idylle joliment aimer minois s
entimental...

一護の声は暖かい中にもしつかりとした声があり、それに寄り添う
よに弾かれるルキアと修兵のギターに、包みこむようなウルキオ
ラのベース、すべてをしつかり支えるドラム、と全てバランスよく
とられていた。

観客もそれにうつとりし、顔を赤らめている者までいた。

(これなら最後までいけそうだな・・・)

と、一護が少し安心しサビに入ろうと息を吸い声を出さうとすると、

(・・・え? 声が・・・でねえ)

一護が少し焦ると、修兵が小声で話しかけてきた。

「どうした?」

観客もおかしいと思つたようで少しずわつき始める。

(どうしたらいい?俺のせいだ・・・)

一護が焦るとルキアがこつそり耳打ちをした。

「大丈夫だ。任せろ」

どうこうことか聞こうとすると、恋次のドラムの音が聞こえ、ルキ
アとウルキオラが歌い始めた。

少し声が出るようになつた一護も慌てて歌い始めた。

affectionnement affectueux ten
drement avec tendresse pour les beaux y
eux tendresses

lovable auspicious darling to

starve for love

fruit of love love-s sake pass

ion

sweethart attachment longing f

or other

tender passion village amoureux

tomder amureux

passade sahn suehtiger

曲を終え修兵が話し始めた。

「いや - わりいわりい。サビに行くといひ間取り過ぎたわ。『あれ、
どうやって入るの?』って思つちまつてさー」

「先輩ー、しつかりしてくださいよー」

「つるせえ! 恋次のくせに!」

「なにその恋次差別!」

会場もクスクスと笑い暖かい空氣に包まれた。

舞台裏

「一護、喉大丈夫か?」

「んー、さつきよりはマシ」

ルキアと話していると、修兵が一護の顔を見てため息をつき、

バチンッ! とテロップンをした。

あまりの痛さに一護は身悶えうずくまっていた。

「つたく・・・なんで早く調子悪いって言わない
「・・・え?」

怒られると思つていた一護はきょとんとしている。

「どうせステージ台無しにした、とか思つてんだらうけどそんなんわ

けねえだろ。

喉がかかるほど頑張つてくれたんだろう？ありがとな」
頭をわしゃわしゃと撫でながら言つた。

「お前らもありがとな。おかげで最高の思い出になつたよ」
笑顔で全員に感謝を告げた。

大混乱の文化祭（3）（後書き）

ふおおおおおお・・・・・やつとできた・・・
お待たせしてすいませんでした！

英文の歌詞のほうは突っ込まないでください。
いろいろ間違つてますが触れないで！

満面の笑みの修兵パワーはすごいと思うのです。
一撃でノックアウトですね。

これからのは本日書いた活動報告にて詳しく書いています。

では、ここまで読んでくださいありがとうございました！
誤字脱字、感想などお待ちしております！

年上の人のが気になるんですがどうしたらいいですか？（前書き）

有言実行できなくてすいません！

今日は保育体験の話です。
アニメのオリジナルキャラが出てきます。

年上のあの人気が気になるんですがどうしたらいいですか？

「みんな～！今日はお兄ちゃんとお姉ちゃん達が遊びに来てくれました！仲良く遊びましょうね！」
『はーい！』

今田は近くの保育園で保育実習が行われていた。

「元気だなー・・・」
「うむ！私も負けていられんな！」
「何張り合ってんだ」

子ども side

私は九条望実。4歳だ。今日はお兄さんたちが来たらしい。
私にはあまり友達がない。いつも一人だ。
みんなをボーッと眺めていると

「よつ！」

オレンジ色の髪の毛をしたお兄さんが話しかけてきた。

「・・・だれ？」
「俺は一護。お前の名前は？」
「・・・九条望実」
「望実か。望実はみんなとあそばねえのか？」
「かんけーない」
なんなんだ、こいつは。いきなり話しかけてきて。
すると、そいつは私の髪の毛に触ってきた。
「なにをする」
「いや、綺麗だな、と思って」
「・・・え？」
「髪の毛の色、綺麗な縁だな」

初めてだった。みんなから変な色だ、と言っていたこの毛を褒められたのは。

うれしい。

「お前の髪の毛もキレイなオレンジ色だ」
少し恥ずかしかつたけど素直に言つた。

「本当か？ ありがとな」

そう、笑顔で頭をなでられた。

顔がだんだん熱くなつて、なんだかポワポワする。

「一護！」

知らないお姉さんが名前を呼んだ。

「おお、ルキアか。どうした？」

「向こうでその子と遊びたいと子供たちが言つてこてな。誘いに来たのだ」

話している言葉は良く聞こえないけど、見えてモヤモヤする。

「望実、向こうに行かないか？」

「でも・・・」

向こうに行つたら一護と離れてしまつ。

「俺も行くから。な？」

「わかった」

そう言って一護の後ろを付いていく。

「お前も案外隅に置けんな」

「は？」

小さい声でなかなか話が聞こえない。

「ルキアお姉ちゃん！ 呼んできてくれた？」

「ああ、連れてきたぞ！」

「やつたーー僕たち、のぞみちゃんと遊んでみたかったんだーー」

「・・・私ど？」

びっくりした。だって今まで話したことなかったのに。

「なにするー？」

「んー、じゃあねえ・・・かくれんぼしようつよー。」

「さんせーーのぞみちゃんもいい?」

「う、うん」

いきなり話しかけられて焦った。

「よし、鬼は私たちがしよう。10分までに見つけられなかつたら
鬼が負けでいいな?」

『はーー!』

「じゃあ10秒数えたら行くからなー。・・・よーいドン!」

2人が目をつぶつたら一斉に逃げ出した。

私たちは木の上や机の下に隠れる。

私は水道台の下のくぼみに隠れた。

こじは見つかりそうでなかなか見つからない。

「10ー・・・よし、行くぞー」

「私はこじはを探す。貴様はあつちだ」

「へいへい」

数分後

「真子はつけーん」

「なんでわかんねん。こじはマンホールの中やで」

真子は関西弁が特徴の男の子だ。

マンホールの中からひょっこり顔を出している。

「俺も昔マンホールの中に隠れて落ちそうになつたからな
(実話です)

「アホやろ・・つじギヤー!..」

「うおー言つてるそばから落ちそうになつてゐじゃねーかー。
無事救出されたよつだ。」

「リサちゃん見つけたぞ!」

「みつかつてもーた」

「からせ」三つ編みでメガネをかけている関西弁の子だ。

「といつより『口』、暖炉の中だぞ。危ないだろ？？」

「IJの前六車先生の机にエロ本を置いといて怒つて追いかけられたとき見つけたんや」

少し自慢げに話すリサ。

「なんというか・・・そういう物はまだ早い」

もう少し時間が経つとほとんどの子が見つかって残るは望実だけだった。

「『I』にいるんだ？」

2人とも望実の前を何回も通つたが全然気づいていない。

「どこに隠れたんだろうね？」

子どもたちも不思議そうだ。

「お2人さん、あと10秒やで」

「本当だ！」

真子の言葉を聞いてカウントダウンをし始めた子どもたち。

「3・2・1・・・ゼロー！！」

「のぞみちゃん出てきてーー！」

大声で言つと二人が立つていた後ろの水道の下からひょっこりと顔を出した。

「あー・・・そこか」

「すげー！のぞみちゃんつよーい！」

何が強いのか分からないが子どもたちは望実を取り囮んでいる。

望実は少し照れた様子で話していた。

始めは馴染めなかつた望実だが一護たちが来たのがきつかけでみんなと溶け込んでいった。

夕方

「お兄さんとお姉さん達にありがとうの挨拶をしましょ？」

「ええーー！？もう帰つちゃうの？」

子ども達からブーイシングの嵐だ。泣き出している子もいる。

「みんな、わがまま言わないの。はい、ありがとうございました。は？」

『ありがとうございました』

校門前まで子ども達は送ってくれた。

「ばいばーい！」「また来てねー！」

そう言って見送る子ども達の中で望実が一いつちらに走ってきた。一護の側までくると足にしがみ付いて、ルキアに言った。

「負けないぞ！」

きょとん、としたルキアはすぐに察してクス、と笑った。

「フフ、楽しみにしているぞ」

そのやり取りの意味が分からぬ一護は頭に？を浮かべている。

そんな小さな九条望実の初恋

おまけ

「そりいえばウルキオラと遊ばなかつたな」

帰り道、いつもの3人で話していると一護が言った。

「ずっと女の方にままで」とをしろ、とせがまれていたからな

「珍しいな。父役か？」

「いや、執事役だ」

「・・・は？」

年上の人の方が気になるんですがどうしたらいいですか？（後書き）

THE・一時間クリティイ

今日は護廷十三隊侵軍篇のオリジナルキャラクター、望実ちゃんが
出てきました！

望実ちゃん好きなんですよー。可愛いですね。

拳四と羅武は幼児に変改できませんでしたので先生です（笑）

おまけのウルキオラの話は妄想です（笑）

執事っぽくないですか？え？違つ？そつか・・・

では、ここまで読んでいただきありがとうございました！
誤字脱字の報告、感想などお気軽にどうぞ！

焼き芋をやるときは注意しちゃう（温書き）

1ヶ用近くほつたらかしですかねー。

今日は焼き芋の話です。

焼き芋をするときは注意しましょう

『焼き芋するから公園来いよ』

悪夢はこの一本の電話から始まった。

「おーい、来たぞー！」

「おう、こっちだ」

ルキアが叫ぶと一護が返事をした。

「一護！ 焼き芋は何処だ！」

「アホ、これからするんだよ」

何かに疑問を持つたウルキオラが聞いた。

「何故公園でするんだ？ 家でも出来るだらう」
「うちのバカ親父が騒ぎだしてな、公園でする事になつた」

バタバタと足音が近づいて來た。

「よー朽木にウルキオラー來たんだな」

「「こんにちは」」

海燕も友人の修兵を呼んだらしく一緒にやつてきていた。

「よー元氣か？」

「お久しぶりです、先輩」

「バンドのやつ見たぜ？ 激かつたなー」

文化祭の次の日に海燕が撮ったビデオを黒崎家で見たようだ。ちなみに内容は、全体で撮られたものと、一護オンリーで映つていいものの比が2・3だったそうな。

海燕の意見『一護を撮らなきゃ誰を撮る』

「皆の衆ー！」いちで『ドキッ！黒崎家+ の焼き芋大会』をするぞ！

「またアレさんのかよ……」

（『ドキッ！黒崎家+ の焼き芋大会』とは）
まだ焼いていない芋を半分に切り、少しきりぬいた所に指令が書かれた紙をいれ、新聞紙で包んでから焼ぐ。
当たつた指令には必ず従うこと。

（Wikipe diaには書いておりません）

「ようしー始めるぞー！」

『おーー！』

何だかんだ言って、全員やる気十分だ。

30分後

「……げ、当たっちまつた
「ざまあみろ！日頃の行いが悪いからだ！」
「女装しているてめえに言われたかねえよ。視界の暴力だ。消え失せろ」

一護の前で威張っているのはセーラー服姿の一護だった。
筋肉質な体とゴツイ顔には色々無理がある。

「お兄ちゃん達のじつちかに着てほしかったのに……」

ぼやっと遊子が呟くと、一護と海燕の背筋が凍った。

「どうりで一護の指令はなんだ?」

「えーっと…『恋次に電話をして罵詈雑言を吐く』

「おー私のだな!」

指令を出したのはルキアだつた。まあ、ルキアらしいと言えばルキアらしいが、相変わらず恋次が不憫だ。

「お前、目が輝いているぞ。

……たく、友にこんなことしなければならないとは……」

「一護、お前も顔が緩んでいるぞ」

心無しか、眉間のしわが緩んでいた。

“ プルルルル……ピッ ”

『 よー一護。どうした?』

「恋次、悪く思うなよ

『 は?』

「バーク、単細胞、変質、赤パイン!」

『 はあー?ちょっと待てゴルア!喧嘩売つてん』

“ ピッ ”

「これでいいのか?」

「ああ、バツチリだ！」

満足そうな2人の様子を見た夏梨はウルキオラに聞いた。

「ねえウルキオラ君、あの2人つていつもこいつなの？」

「ああ」

「ふーん……」

物珍しそうな顔で夏梨は2人を見ていた。

もしやもしや……

「む、俺か」

声を出したのはウルキオラだった。

「指令はなんだって？」

「『モノマネをしろ』…か」

「あ、あたしのだ、それ」

ウルキオラは夏梨のを引いたみたいだ。

「…アレをする」

「まさか…アレか？」

「本当にアレをするのか？」

「ねー、アレってなに？」

3人が言っている「アレ」が気になつたのか遊子が聞いた。

「見ていれば分かるさ。アレの威力は絶大だ」

「夏梨、先輩、覚悟しておいたほうがいいですよ」

「「え！？」」

まさかここで話を振られるとは思わなかつた2人は驚いた。

「……いくぞ」

一護とルキアは唾を飲み込んだ。

「パースター！！！」

パースター…スター…ター…

エコーしながら町中に響いた。
すると……

「お兄様？どうかなさいましたか？」

「え！？夏梨ちゃん！？」

「あっ、え！？なに今の！？」

「マズいねえ～君の飯」

「おい修兵！？」

「ん！？なんだこれ！？」

ちょっととした混乱に陥っている4人。

「てか、久しぶりの台詞がこれってどうなの！？」

そんな言葉を無視して一護は説明をしていく。

「前に学校でウルキオラがこのモノマネをしたとき、クラスにいる

路端と石田、廊下を歩いていた冬獅郎が、さつきみたいな反応して
な……」

3人は遠い田をしながら話した。
余程大変だったようだ。

混乱が治まり、全員が食べおわった頃

「ふう……結構詮かったな」

他愛ない世間話をしていると…

「ゴルア！…今年もまた黒崎家かアアアアアアア！」

ほつきを持ったホリの深い男性が怒鳴りながらひたちに走ってきて
いる。

「げつ！町長だ！」

一心がマズい、という顔をした。

「親父！今年も話してなかつたのかよ…」

「いや～…あの……てへ」

「「へへ　じやねエエエエ」」

びつやら許可を取らずにしていたようだ。

「とりあえず水をかけてにげるぞ…」『サー－イエッサー－』

海燕の掛け声とともに俊敏な動きであらかじめ用意しておいた水を

火に掛け、直ぐ様逃走した。

そして捕まえ損ねた町長は……

「……くそー！今年も逃げられた！いつか捕まえてやるぞ、黒崎家め
ええええ！！」

焼き芋をするときは注意しましょ（後書き）

某国擬人化漫画ネタ多くてすみません。

なかの人ネタが好きなんです！

あと、海燕と修兵が空氣ですみませんでした！

誤字脱字、感想などお待ちしております！

ツトルベリー「機嫌ナナメ（前書き）

しばらく更新できなくてすいません！

今日は結構長くなりそうなので2、3回に分けたいと思います。

ツトルベリーは「機嫌ナナメ

「黒崎さーん！ノド、渴いていませんか？」

白衣を着た悪魔がやつてきた。

「……渴いていません」

「まあまあ、遠慮せずに」

10分くらこのやりとりが続いている。

この男 浦原喜助はですと団の顧問だ。

そのくせたまにしか顔をださず、やってきたと思つたら一護に人体実験をさせようとするのだ。

「そりいえば一護、先ほど飲み物を探していなかつたか？」

「おまつ……ルキア！」

「男らしく逝け、一護」

「漢字違つ！」

ルキアとウルキオラは浦原についた。

「……安全なんだろうな？」

「もちろんー！」

はあ、とため息をつき飲む覚悟をした。

「ナニ、二ヶ月」

「グイッといつちやつてくださいー。」

グイツ

ドクン、と一護の身体が揺れた。

「ぐあつ……くつ……おー。」

うめき声を上げる一護を見てルキアはびっくりしたことだ、と浦原を睨んだ。

「大丈夫ですよ。ちやあんと成功しています。……ほら」

浦原が差した先には、

幼児姿の一護がいた。

「…………ん？なんかお前ら…………でかくねえか？」

「ふーん、なるほどねえ……」

一護達は浦原による薬の説明を受けていた。

『劇的ビフォーアフター』

これを飲んだ者は一日体が幼児に戻る優れもの。
脳内は実年齢と変わらないのであんな事やこんなことが出来てしまうかも！

(某建築番組ではあります)

とのこと。

「なあ一護

「なんだよ？」

「少し、抱っこしていいか？」

ウズウズした様子でルキアが言った。

「はあ…？やだよ！」

「馬鹿者…こんな姿の貴様を抱かなくてどうする…」

「馬鹿者はてめえだバカ野郎！」

「俺も抱き上げたい」

ウルキオラまでもが名乗りをあげた。

「味方いねえなちくしょ「つめ…」

「まあまあ」

「てめえが言つた悪の元凶が…」

“びゅぢりー護は”乱心のよつだ。

少し落ち着いたメンバーはこれからどうするか考えていた。

「Jの姿で帰つたら家が混乱するんじゃないかな?」

「兄貴に言えば大丈夫だろ」

「まあそれなら大丈夫か」

大きな問題は解決した。

「……おいその格好は色々まずいんじゃないかな?」

「え?」

ウルキオラが言つたのは一護と浦原の体勢。

今まで一護は浦原に殴りかかつたりしていたので大きくて乱れていた制服がより乱れていた。

今はあはれてもいい様に浦原の膝に座らされている。正直な意見のところ、浦原が変質者にみえる。

「こんなところを誰かに見られたら大変だぞ」

「大丈夫だろ。今日は何も依頼来ていないし」

「そうつすよ。生徒会のあの副会長に見られない限

「ン」

り　　と、告げうとしたときノックの音が聞こえた。

「すまん、少し聞きたい事があるのだが……」

ガラツ、と生徒会副会長の冬獅郎が入ってきた。

「…………」

「　「　「　「…………」　「　「　「

数秒の静寂、そして……

「……取り込み中失礼した。それと浦原先生は後で生徒会室に来て下さい」

「ちょっと待てヌヌヌヌヌ！」

立ち去りうとした冬獅郎を一護は必死に呼び止めた。

「心配するな、お前はちゃんと両親の所に帰してやるからな」

大きな勘違いをしている冬獅郎に話す。

「違つんだよ！俺は一護！」

「……黒崎？」

冬獅郎は目を見開く。

そもそもそうだろ？ 知り合いが小さくなっているのだから。

「浦原さんに変な薬飲まされてこうなったんだ！」

「変な飲み物なんて失礼ッスね。劇的ジフォーアフターッスよ
「かわらねえよ！」

「その突っ込み具合といい、本当に黒崎なのか……」

よつやく信じてくれたようだ。

ツトルベリーは「機嫌ナナメ（後書き）

今回は初の浦原さんと久しぶりの冬獅郎くんでした。

題名のセンスがなくて笑えない……（、；、）

次は出来るだけ早く更新するつもりですが……うん、頑張ります。

感想、誤字脱字や文章構成の指摘などお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3501w/>

ですっとダンス

2011年11月21日07時54分発行